聖　書：Ⅱサムエル5：1〜25

説教題：主は先に出ている

日　時：2018年2月25日（夕拝）

この章でついにダビデがイスラエル全体の王になります。彼が主からこの約束を最初に受けたのはサムエル記第一16章でした。それから21の章が費やされました。ここに至るまでには長くて苦しい道のりがありました。特にダビデはイスラエルの初代王サウルに命を狙われ続けました。そしてサウルの死後、いよいよ王になる時がやって来たかと思われましたが、なおサウルの家から対抗勢力が現れ、ダビデは7年半も待たされました。しかしついに時至って主の約束はこのように成就することになったのです。ダビデはここでも自分から王になることを求めたのではありませんでした。そのタイミングと方法は主にお委ねしていたところ、全イスラエルの方からヘブロンにいたダビデのところに来て、私たちの王になってくださいと願い出たのです。彼らは2節で言います。「これまで、サウルが私たちの王であった時でさえ、イスラエルを動かしていたのはあなたでした。しかも、主はあなたに言われました。『あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがイスラエルの君主となる。』」　私たちはこれを読んで、このように言うのなら、なぜもっと早くこの行動を取らなかったのか、そうすればダビデもイスラエルももっと良かっただろうに！と思うかもしれません。しかしそうは行かないのがこの世の現実でしょう。しかし彼らはこの間、見ていたのです。主を待ち望んで生きるダビデの高貴な生き方を。この人こそ主に召された器であることを。この彼と主は共にいて、彼がイスラエルを本当の意味で導いてきたのだということを。ですからこれまでのダビデの生活は決してむだではなかったのです。長い時間がかかったことのすべてを用いて神はこの日を来たらせて下さったのです。ここに私たちは改めて神の時を待つことの大切さを教えられます。主の約束は時が来るとこのように実現します。ですから私たちは人間的な思いと方法で祝福をつかみ取ろうと勇み足を踏むべきではありません。主はご自身に信頼して従う者を、ご自身が定めた最も良い時にこのように祝して下さることを信じて、私たちもダビデのように主に信頼し、主の道だけを歩み、主が下さる祝福にこそあずかりたいと思います。

さて王としてのダビデがしたこととしてまず語られているのがエルサレムを攻め取

ったことです。エルサレムは主がイスラエルにくださった約束の地の領土内にありましたが、ヨシュア記や士師記に記されていた通り、イスラエルはすべての町の先住民を追い払うことができませんでした。そのため、先住民たちがしっかり支配権を保持して住み着いている町がありました。その一つがエルサレムでした。このような町があることによってイスラエルの領土は分断されていました。またその地の住民がペリシテ人らと組んだりすれば、イスラエルにとって大きな不安材料となります。そこで地理的にも重要なこの町をダビデは攻め取ろうとします。エブス人たちは長らくこの地を支配して来た人たちとして相当自信があったようで、6 節で「目の見えない者、足のなえた者でさえ、ダビデを追い出せる」と豪語します。しかしダビデは奇しい方法でこの町を攻め取ることに成功します。8 節は原文をどう訳すべきか難しい箇所のようですが、新改訳の通りに読めば、ダビデは水汲みの地下道を用いたようです。そこから攻め込んだということでしょうか。ダビデはエブス人に勝利し、10 節にある通り、益々大いなる者となります。このようなダビデを見てでしょう。11 節にはツロの王ヒラムが使者を送り、杉材、大工、石工を送ってくれたことが書かれています。彼らはダビデのために王宮を立ててくれました。ダビデはこのことを通して、主が彼をイスラエルの王として堅く立て、彼の王国を盛んにされたのを知りました。

ここで大事なことは、主がこのようにしてくださった目的は何なのかということです。これはダビデ個人がこの祝福を喜び楽しむためではありません。12 節の真ん中に「ご自分の民イスラエルのために」とあります。ダビデが王として立てられ、主の祝福を受けているのは、神の民イスラエルの祝福のためです。ダビデはそのために仕えるしもべなのです。王とは、ふんぞり返って皆を従わせて個人的にいい生活をする者ではなく、その国に対する神の目的に仕える者です。ダビデはそのことを自覚していました。王になったからと言って自分の幸を祝い、毎日祝宴の生活をするのではなく、神の目的をわきまえ、神がくださった「使命」に生きなければならない、とダビデは幸いにも見るべきところをしっかり見ている人だったのです。

さて、そのダビデはさらにそばめたち、妻たちをめとったことが 13〜16 節に記されています。一体これはどういうことか！ダビデは何をやっているのか！と私たちは思うかもしれません。しかし 3 章 2〜6 節でも見た通り、私たちはまず当時の文脈で読まな

くてはなりません。当時の世界では王たちがこのようにするのは一般的な習慣でした。今日の私たちから見ると受け入れがたくても、もし当時私たちがそこに生きていたなら、このことに何の疑問も反発も感じなかったと思います。ですからこれはダビデの特別な罪や問題を暴こうとした記事ではありません。むしろ彼がいよいよ力ある者となったことの一つの傍証として記されていると言えます。ダビデにはこうしてさらに息子たち、娘たちが生まれたのです。もちろんそう述べるだけでは気持ちが収まらない方もいらっしゃることでしょう。確かにこの結果、後々色々な問題が起こって行くことになります。その事の成り行きを通して、聖書は一夫多妻は神の御心でないことを示しています。先に触れたように、今日の私たちの視点でダビデを責めることはフェアではないと思われますが、このダビデの不完全さは私たちを誤った英雄主義から守ってくれます。ダビデは素晴らしい人物であり、ある意味で私たちにとっては雲の上にいるような特別な存在ですが、だからと言って一点の欠けもない完全な王ではなかった。私たちにとって全き信頼を置けるまことの王はやはりイエス様お一人だけです。その方へと目を移し、その方に信頼するようにと導かれることが大事ではないでしょうか。

もう一つこの章に記されているのはダビデがペリシテ人の脅威を取り除く働きをしたことです。サムエル記第一 9 章 16 節に記されていましたように、イスラエルの王の第一の使命はペリシテ人の手からイスラエルを救うことでした。ダビデは新しく油注がれた王として、このための働きをします。ペリシテ人としてはこの新しい事態を見過ごしているわけにはいきません。これまではサウルとダビデの間に戦いがあるのを見て、その分裂を手助けすることによって、イスラエルを弱体化させることができると目論み、彼らはダビデに協力的でした。しかし今やダビデがイスラエルの国家統一を果たしました。これでは話が違って来ます。そこで彼らは慌てて攻めて来たのです。果たしてダビデはどうしたでしょうか。ここには初代の王サウルとは対照的な、イスラエルの王にふさわしいダビデの姿が示されています。

まず私たちが見るのは、ダビデが主に御心を伺っていることです。ペリシテ人がレファイムの谷間に展開しているのを見て、ダビデは 19 節でまず主に伺います。「ペリシテ人を攻めに上るべきでしょうか。彼らを私の手に渡してくださるでしょうか。」　ダビデは自分の知恵と力に頼って行動せず、主に頼ります。そして主からの答えを得て戦い、

見事に勝利します。興味深いのは2回目です。22節にペリシテ人がまた上って来て、レファイムの谷間に展開したとあります。18節の状況とほぼ同じです。ですから普通なら前と同じようにすれば良いと考えるところではないでしょうか。しかし主に伺うと今度は答えが違いました。1 回目は「上れ」でしたが、2 回目は「上って行くな」でした。この主の導きに従って行動してダビデは2回目も勝利します。ここから教えられることは、前と同じだからと判断して人間の知恵で行動してはならないということです、確かに経験は重要です。過去から学ぶことも大切です。しかしただ過去にこの方法でうまく行ったからと言って、今回も同じようにすれば良いのではない。そのようにして結局、人間の知恵や経験に頼るべきではない。むしろそのたびごとに私たちは主に聞く必要があるということです。

　そしてここで強調されているのは、ともにいてくださる主はどんな方かということではないでしょうか。1 回目の戦いでダビデは「上れ！」との主の指示に従って出て行きましたが、その時の経験について彼は20節でこう言いました。「主は、水が破れ出るように、私の前で私の敵を破られた。」　水が破れ出る勢いは私たちの想像もつかないものです。堤防が決壊して水が破れ出てくる時、それは私たちには想像も及ばない恐ろしい状況になるでしょう。人間になす術はなく、誰もその水の勢いには逆らえません。そのような圧倒的な主の導きがあったのです。2回目はどうだったでしょう。主は23節で「彼らのうしろに回って行き、バルサム樹の林の前から彼らに向かえ」と言われます。そして 24 節では「バルサム樹の林の上から行進の音が聞こえたら、そのとき、あなたは攻め上れ。」と言います。この「行進の音」は何でしょうか。おそらくそれは主の軍勢の行進の音と考えられます。その音が聞こえたら、あなたは攻め上れ。そのとき、主はすでにあなたより先に出ているからと主は言われます。何という素晴らしい約束でしょう！ダビデは自分の力で戦うのではありません。主が先に出て戦って下さるのです。ダビデはその後に出て行って戦うのみです。良く見れば1回目の戦いの時もそうでした。ダビデは 20 節で、主は私の「前で」私の敵を破られたと言っていました。主がダビデに先立って戦いに出てくださり、彼の前で事態をすでに決定的なものにして下さったのです。この章に見るダビデの勝利の祝福の秘訣はこのような主が彼とともにいてくださったというところにあったのです。

私たちもここから学ぶことを自分の歩みに適用したいと思います。その一つは、私たちのすべての取り組みにおいて主により頼むということです。主こそすべての上にいます主権者です。私たちが自分の頭で考えて、前と同じ状況だから前と同じようにやればいいと考えてはならない。状況は日々新しいものです。その一つ一つの出来事において、あるいは毎日毎日、私たちは主の御言葉に聞き、主に祈り、主との交わりの中で事に当たるべきことを忘れないようにしたいと思います。

そして合わせて覚えたいことは、ともにいてくださる主は力ある方であるということです。破れ出る水の勢いをもって戦いにともに出てくださる方、いや私たちの先に出て戦ってくださる方です。そのような方がともにいてくださることを信じるなら、私たちの戦いには何と大きな望みと力が与えられることでしょうか。もちろんこれは私たちの自分勝手な戦いのための励ましではありません。ダビデの戦いは、12 節で見たように、神の民のための戦いでした。あるいはこれは御国のための戦いと言っても良いと思います。あるいは主の栄光のための戦いと言い換えることもできるでしょう。ですからこれは神に与えられた使命を遂行することにおける励ましです。私たちもそれぞれ自分の個人的願いや個人的な自己実現のために歩んでいるのではありません。私たちも主の栄光のため、主の御国のため、主の民の祝福のために、なすべき役割や使命が与えられています。その御心にかなう働きのために主は先立って進み、戦ってくださるのです。その主が私たちのこの週の戦いにも共にいてくださることを信じて私たちに与えられている主からの使命に向かいたいと思います。私たちの先に出ていてくださる主によって勝利し、主の御国のために仕え、用いて頂く光栄に歩みたく思います。